

化の表現的基底である。然し此處で反省さるべきは、日々の生活におびやかされ現世にあえぐ民衆の未來觀である。貴族の爲す實體的な行が不可能であり、不幸なる現實を有するが、せめて未來のみは幸福でありたいと願望する民衆の把握する未來觀の歴史性が注意されねばならない。生きんが爲になす所作、其處には自己の善人たるを許容する何ものもない。貴族の行的態度に依り、より強烈に拍車される民衆の現世への絶望と、未來への願望、この新しい文化的苦惱に答ふる所に、法然・親鸞は始めて歴史的たり得る。かくして現實肯定の世界觀より現實否定をその立場とする方向が完成する事に依り、日本人の持つ未來觀は展開し、世界觀は飛躍する。正しく鎌倉室町の文化は、かかる日本人の思想的展開を基調として、獨自なる性格を顯現して行つた。この様な廻心の文化形成を、貴族武人は禪的な方向により、庶民は眞宗的に行なつたと考えたい。彌陀に救はるる事を教えられた田夫野人、それは總ての實體的なもの、現世的なものをして、然もあくまで信仰を内にひそめ、何氣なき生活をなす。この様な所謂妙好人の生活は、日本精神文化の實態を、あます所なく、生活化したものといえよう。

日本文化、それは狭い自然と、乏しい資源の中に置かれた人間の最高度の生活表現である。私は日本人が、かかる天地におかれ、然もその現實生活に精一杯の努力を盡す時に生ぜしめた文化なる點に於てその世界性を信ずるものである。

## トインビーの史觀

本學講師 壽 岳 文章 氏

トインビーが『歴史の研究』十三巻を書く様になつたのはシユベングラの『西洋の没落』を見てそれが觀念的主觀的であるのにあきたらず、イギリス風の實證的科學的な精神から西洋文明のあり方を見てゆかうとしたからだつた。一九二七年に着手した最初の三巻は一九三六年に出版せられ、第四巻以後は一九三九年から後に書かれた。彼はこの書の中で諸多の文明の發生、生長、没落とその公式、世界國家、世界宗教、空間と時間とに於ける文明、生命現象のリズム、現在の文明の將來への見通し等について精密周到な研究調査の上の結論を與へてゐる。

彼によると、この地球上に發生した文明は廿四を數へるが今日尙活力を有するものは、西洋文明、ギリシヤ正教を奉ずるロシア及東歐の文明、イブラム文明、インド文明、及び極東文明の五つにすぎぬ。西洋文明は現在他文明を制壓してゐるが、亡ぶべき運命の下にある。併しそれは絶対不可避的なものではない、回避し立直る餘地の殘されてゐるものだ。そしてそのことを可能にするものは精神的自覺である。

普通に文明は人種と環境との構成だと考へられてゐるが、この説は十分に妥當なものとはいはれない。風土氣候の等しい處にいつも同様な文明が生れる譯でもないし、白色人種優越論の如きは爲にする處のある人爲的迷信だ。

トインビーは支那の易經の思想を借りて自己の歴史觀を形成

し、歴史を陰陽のリズムを持つものと考へてゐるのは注目すべきことである。

元來一つの文明が存続するためには自己に對立する文明の存在が必要なのだ。神は人間の生活を完全無爲の状態より脱出せしめこれを向上せしめるために悪魔を置いたといはれる。文明に於ける悪魔的なものの出現が『危機』である。これがあらはれることによつて緊張の状態が保たれてゆく。危機の試煉にたえこれに乗越えてゆくところに文明の發達がある。同じ状態に停滯する文化は亡びる。そしてこれを超えさせるものは精神的なものである。

人類最後の文明はこの様な幾多の試煉を経て停滯なく向上していつたところのものといふことにならう。

東西兩陣營の和解可能の理由として彼は、兩者が相互に相互の對決者として刺戟し合ひ、相互に進歩しつつそれぞれの場處に独自の生活を營んでゆくことになるであらうといひ、その爲に世界國家が必要で、それをつなぐものは宗教的なものでなければならぬといふ。

この様なトインビーの史觀を眺め、日本人として又大乗佛教の文明の下にあるものとして考へる時、われわれはこの文明の存續を願ふが故に、これと對立する悪魔的存在としての西洋文明に對しわれ關せずの態度を取ることなく、勇敢にこれと對決することが必要である。周圍から寄せて來る文明と戦ひ決して逃避することなく、それによつて大乘佛教文明を形成せねばならぬ。

明日の日本を思ふ時、特に佛教の將來を考へる時、トインビーの史觀はまさしくわれわれの進み方に一つの示唆を與へるものである。(文責在記者)

## 大谷學會秋季公開講演要旨

今回は特に清澤滿之先生の五十年忌を記念して舉行された。

### 眞宗と精神主義

本學名譽教授 金子大榮氏

清澤先生の思想、それは有限と無限との關係にある。即ち有限よりみれば無限はその外にあり、無限よりみれば有限はそのうちにあるといふ、これが先生のすべての思考方式であつた。しかも有限者の自覺とその有限性の限界における無限者との對應は決して論理的にのみなされるものでなく、つねにそれは體験的になされるものであつたのであるが、さらに、その有限と無限との交渉には、まづ有限の中に無限なるものを受け入れるといふ受用のほたらきと、いま一つ有限なるものを無限の中に歸入せしめるといふほたらきが考へられる。而して有限者の無限なるものの受用とはかへつて無限者が自らを有限なるものにして有限の中に入ることであり、さらに有限者の無限への歸入とは無限者より云はば招き入れることである。

さて、無限者よりみれば有限者が有限であることは偶然なことである。まことなるものよりみればすべてはまことであるべきはづであるから、如來より云へば衆生が迷ふてゐるといふこ